
くろまる

5 0 5

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

くろまる

【Nコード】

N5581P

【作者名】

505

【あらすじ】

黒くて丸い何か

見える人だけに見える何か

何も喋らず、何もしない

正体もしらない

でも、たしかに存在する

昔から聞く相手によって異なるから未だに正体は知らない

唯一、共通している事は色が黒くて丸い、そして明るい時しか出ない。という事だけ

幽霊や怪談話などの類の話と来れば、夜の校舎やトンネルなどと
いった暗い所が相場だが

どうも、こいつはそういう所には出ないらしい。

この話を聞いたのは去年の夏

仕事の関係で立ち寄った店で後のグループの会話を偶然聞いた話だがそれも場だけで半年以上も忘れていた。

思い出したのも偶然で、ネットの掲示板で見た書き込みを見た時に

「ああ、そういえば前にこんな話聞いたな」とふいに思いだした。

そこでもやっぱり「黒い」「丸い」という事で話が進んでいるようでありあえず、この2つは確定的な事らしい

割と多くの人が目撃しているようだったが

「海で見た」

「町中で見かけた」

といった具合で場所も色々あって、中には「夢で見た」なんて意見もある始末

この話を聞いた時には「山の中」という事だったので
てつきり、そうなのかと思っていたが

どうやら場所に特定の決まりはないらしい

いつのまにか「くるまる」「っていう名前で通っているらしいが

名前というよりは見たまんまの事であり

別に斬新でも何でも無い

それに「黒くて丸いなにか」という情報だけ言われたら、こうなっても仕方無い

そんな中見つけた「一緒に探しに行こう！」なんて記事

仕事は夜勤でちょうど昼間にする事がなかったので

丁度いい暇つぶしではあるが

別に正体とかはどうでもよかったのでこれはスルーした

理由はもう1つあって、実は何度も見たことがあるのだ

ただ、その時は誰でも見える普通な事だと思っていたので何も疑問もなかった

それが高校の時に普通は見えない事を知り、人に聞いたり、ネットで調べたりで

ようやく得たのが現在の知識である

別に何もして来ないし、何も喋らない

ただ一瞬、または短時間だけ現れて

スツと物陰に隠れる

そして、すぐに覗いてももういない。

ただこれだけの事

別にみたら死ぬとかもないし

いい事の前兆って訳でもない

存在するだけ

見えるだけ

ただそれだけで、特に価値も何もない

0 (後書き)

ご回覧ありがとうございます。

初心者で、まだまだ至らぬ点が多いと思いますが

是非、よろしくお願い申し上げます

真夜中の人々編 1

駅の前は夜でも人が絶えない
時刻はもう23時をまわったが、まだまだ活気がある

この時間になってようやく開く店も多く存在し
明日が別に休日でなくともみんな遅くまで起きている

S君も夜勤仕事が今終わった所で
家に向かう最終電車に乗るため駅に向かっている所だ

田舎に住んできると自然は多いが何かと不便でな事が多く
特に交通の便利が悪い

S君もそんな一人で、この電車を逃すと家に帰れないという状況で
仕事の関係上、いつもギリギリになるので
乗れないで近くもネットカフェで何度一晩を過ごした事があるか
数えるのも大変である

Sの部屋からから見えるのは、周りを囲むようにある山と数件の家
遠くにぼんやり見える駅と家のすぐ横にある自動販売機が1台
もう5年は変わってない景色

それとは異なり、この駅の周りはずいぶん変わった
角にあった飲食店は潰れてなくなり、今では月極駐車場になっている
空き地だった所はマンションが建設され
改装工事を繰り返して駅自体も巨大になっていった

そんな中にあっても唯一変わらない地下街の一角

そして変わる事なく商売をしている占い師

この占い師はよく当たると評判で
毎日のように行列ができている

ほとんど女性だが、たまに男性客も並んでいる

噂では金は取らず無料で占ってくれるが
自分の知りたい事は何も教えてもらえず
ただ一方向的に向こうがこちらの未来やアドバイスを教えてくれるだ
けらしい

それでも噂が噂を呼び、今では県内では一番評判だという
お礼という事で菓子だのお金だのを持ってくる人が絶えないが
その占い師は絶対に受け取らない

ただ黙って、首を横に振るのだった

そして今、その数少ない男性客と一人として
S君も並んでいる

ついさっきまでは急いで帰宅するつもりだったが
急に気が変わったらしい

一人暮らしたと、こういう自由がある所はいい
遅くなるうが、帰らないでいても、誰にも迷惑はかからない

ただ、同時に誰も待っていない
ドアを開けても明かり1つない暗い部屋が、ただ広がっているだけ

隣の部屋に住んでいる家族の楽しそうな声を聞きながら寝るのが好きで

たまに早く帰った時は、その会話が聞こえる内にさっさと寝てしまっただけに寂しい訳ではない
ただ、安心するらしい

静かな部屋で一人寝るより、外から聞こえる声の中寝ると
他にも人がいるっていう実感が持てるからだとよく言われたが

すぐに理解は出来なかった

やっと順番が来たようだ、その占い師の前に立つと
占い師はすぐに口を開いた

「今すぐ・・・今すぐ、家に帰りなさい」

真夜中の人々編 2

「それはどういう事ですか？」
迷わず即、聞き返した

「正確にはここには行けない…、帰れないというのであれば帰らなくてもいいから離れなさい」

言葉には重みがあり、かすれた声ながらも気迫があり
視線も強く、悪寒さえ覚えた

言葉を受け取ると同時に自然と足が外に向かった
外に出でも行く場所はなく、自然といつもの場所に逃げ込んでいた

あそこにいたら何が起こったのかは当然気になったが
今はそれよりも、離れる事に体が集中しているようだった

落ち着きを取り戻した頃、足に違和感を感じ自分の足を見ると
右膝だけに白い粉のような物がかかっている

粉というか、ガードレールなどに触った時につく
あの独特の白い物に似ている

臭いもない

トイレでハンカチを濡らし、サッと拭くと簡単に拭き取れたが

そのハンカチは何となく気味が悪いのですぐにゴミ箱に捨てた

捨てたと同じにハンカチは煙のように消えたの見た。

何故かは知らないが、まったく驚かなかった

むしろ消えてなくなってくれた事にホッとしているのが自分でも分かる

何だったんだあれは？

そう思ったのは席について数分後

もう、これが過去の事になった時だ

ここまでの流れで

あの場所にいたら危険というのはこの白い何かの事である、という所までは分かったが

これがどう危ないのかは今だに不明であるが

あれから一度も経験した事がなく、同じ経験をしたという声もない

もうずっと前にあつた過去

誰に話す事もなく、何かに記録する訳でもなく

近い将来に忘れられるだけの物

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5581p/>

くろまる

2011年10月8日14時22分発行